

---

# 時期はずれなバレンタインデーの話

猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時期はずれなバレンタインデーの話

### 【Nコード】

N4379S

### 【作者名】

猫

### 【あらすじ】

何となく書いたオチもなにもない、ただ淡々とした事実しか書かれていない、バレンタインデーの話。

父親の仕事の都合で、転勤を繰り返していた。

生まれたのは横浜。それから栃木、次に広島、そしてまた横浜に引っ越した。

二度目に横浜に引っ越してきたのは小学校の三年生の春だった。

他のクラスメイトはもう一年生、二年生とずっと知っていて、どうやって中に入ればいいのかよくわからなかった。スポーツが得意とか、そういうことがあればよかったのかもしれない。でも、残念ながら私は至極普通の子どもだった。友達がいらないわけではなかったけれど、親友はいなかった。

先生が「二人で組になって」と言う。小学校ではよくあることだ。時々、誰も一緒に組む相手がいなくて、先生と組むことになる。それが嫌だというわけではない、だけど、まるでクラスで浮いた存在であることを他の人に示しているような感じになる。

二学期、今までは先生が強制的に決められていた班を自分たちで決めることになった。クラスの投票でリーダーを六人選んで、そのリーダーが他の生徒を選んで自分の班に入れる。先生は何を目的にそういうことをしたのだろう。

ペットショップのガラスケースで、売れないまま、大きくなってしまった子犬みたいなどでもいばいいのか、自分でも予想していたとおり、私はいつまでたってもこの班にも入れずに、そこに座っていた。でもどこかの班には入ることになる。

「おい」

もうクラスの四分の三が誰かの班に入ったかなと思った頃、座っていた私の前に彼が立った。それは同じクラスの井口くんだった。私は井口くんのことがちよっと苦手だった。クラスを中心になつてゐる男の子の一人で、ドッジボールもサッカーも上手だけど、私に対してはいつもちよっと偉そうな話し方をする。

「何？」

「うちの班入れよ？」

「入っていいの？」

どこかの班には入らなきゃいけない。彼が顎で示した先に、既にすでにその班に入っている子たちがいた。その中には佐瀬くんがいて、私はちよっとほっとした。佐瀬くんは何となく乱暴な感じのする男子の中では優しい男の子で、前に隣の席になつた時によく話していた。私と目が合うと、佐瀬くんがちよっと恥ずかしそうな笑顔を浮かべた。

「うん、入る。よろしく」

それをきっかけに、同じ班の子たちと結構仲良くなった。みんなと一緒に誰かの家に行つて、グループ課題をしたり。班の中に女の子は二人いた、漫画を描くのが上手な山野さんと、もともとこの辺の地主さんである石川さん。石川さんの家はものすごく大きくて、誰かの家で何かをする時はよく石川さんの家で集まることになつた。

でも一番仲が良かったのは佐瀬くんだった。要は佐瀬くんも私も

インドア派で、運動が得意じゃないから、給食の後の昼休みは外に出なくて、中にいて学級文庫の本を読んだりするタイプとそれだけの理由だったんだけど。

「明日のバレンタインデーどうする？」

山野さんが席に来て、ひそひそと私に訊ねた。

「どうするって？」

「誰かにあげるの？ 佐瀬くんとか」

「え、あげないよ」

チョコレートなんて考えてもみなかった。

「そうなの？ だって仲いいじゃん」

山野さんが冷やかに言った。

「うーん、でもチョコレートって好きな人にあげるんでしょう？」

「千秋ちゃん、佐瀬くんのこと好きなんじゃないの？」

好きは好きかもしれないけれど、バレンタインデーのチョコレートっていったら、「りぼん」とか「なかよし」とかの漫画に出てくるみたいな、男の子として好きだと思っ相手にあげるもので、佐瀬くんはそれとはちょっと違う。

「そうなんだー」

山野さんはつまらなそうに私の席を離れて、他の子に同じ質問をしに行った。

その日は掃除当番で、私は廊下掃除の担当だった。無事に掃除を終えて、家に帰ろうと、ランドセルに教科書を入れていたら、男の子が二人、座っている私の目の前に立った。

「平川」

顔を上げたら、それは井口くんだった。隣にいたのは井口くんと仲のいい、中島くん。どちらもクラスでは活発な男の子だった。クラスに馴染むきっかけを作ってくれた恩人ではあったけれど、私は相変わらず、ちょっと偉そうなところがある井口くんが、前ほどではないものの苦手だった。

「何？」

「明日チョコレート持って来いよ。俺と中島に」

「えー何で？ 嫌だよ」

「持ってこないと殴るから」

井口くんと中島くんは連れ立って教室を出て行った。その時、なぜか先生に言いつけるといふ発想が私にはなかった。半べそを書きながら住んでいた父の会社の社宅に帰ると、出迎えた母の顔を見るなり、私はぼろぼろと涙をこぼした。

「クラスの男子に、明日チョコレート持ってこないと殴るって言わ

れたの」

それを聞いた母が笑った。私は真剣だった。井口くんは乱暴な子で、たまにクラスの子と遊んでいて、でもちよつとそれがいじめているみたいに見える時もある。そういうところも嫌だった。なにがなにか井口くんと、大人しい佐瀬くんは仲がよくて、よく一緒にいる。

「それって一人？」

「ううん二人。井口くんと中島くん」

「ふーん、聞いたことない名前ね」

「だって仲良くないもん」

母は私にお金をくれて、これで何でもいいからチョコレートを買っていらっしやいと言った。

「三つ買ってもいい？」

「自分用？」

「ううん。佐瀬くんにもあげようかなと思って」

「ああ、佐瀬くん。仲良しだもんね」

私が買った三枚のチョコレート、母は綺麗に包んでそれに赤いリボンをかけた。次の日、そのチョコレートを持って、私は学校に行った。

その日の授業が終わった放課後、言われた通りに校門の前で待っていた、井口さんと中島さんにチョコレートを押し付けるように手渡した。

「はい」

二人が何か言ったかどうかはわからない。私はそれを渡すなり昇降口から教室に戻って、まだ美化委員会のためにクラスに残っていた佐瀬くんを声を掛けた。

「佐瀬くん!」

「平川さん、帰ったんじゃないの?」

「ううん。ちょっと用事あっただけ。はい」

「これってもしかしてチョコレート?」

「うん」

佐瀬くんが俯いて、「ありがとう」と言った。顔は見えないけど、耳が赤い。そういうつもりじゃなかったから、私も急に気まづくなつた。

「変な意味じゃないよ? いつもお世話になってるから。じゃあね!」

何故か早口で言っつて、そのまま振り返らずに教室を出て、家にまっすぐに帰つた。母が帰ってきた私を見て「みんな喜んでくれた?」



とちよつとニヤニヤして訊ねた。

「わかんない」

その夜、電話が三本、うちにかかってきた。チヨコレートをあげた男の子たちのお母さんだった。横で聞いていたけど、母は井口くんのお母さんと中島くんのお母さんに、私が二人にチヨコレートをあげたのは、持って来ないと殴る、と脅されたからだとは言わなかった。言えばいいのに。

その一ヶ月後、ホワイトデーになった。朝机の中に、キャンデーが入っていた。中島くんが中休みに私のところに来て、「母親が持って行けっつてうるさいから、机の中にお返し入れといた」と言っつて、それが中島くんがくれたものだということを知った。

掃除の後、学校の帰りに歩いていたら、後ろから走ってくる気配がして、振り返ったらそれは佐瀬くんだった。息せき切つて、私の前に立ち止まると、「これ」と言つて、小さな青い包みを差し出した。

まだまともに話せない佐瀬くんの前で何だろうと思ひながらその包みを開けたら、そこには可愛い猫の髪留めが二つ入っていた。

「ありがとう」

「うん。追いついて良かった。じゃあね」

佐瀬くんはまた学校の方に戻つていった。期待はしてなかったけど、井口くんは何もくれなかった。三月の終わり、また父が転勤することになった。決まったのは終業式の後で、クラスの子に挨拶す

ることろできないまま、三月三十一日、私は、両親と妹と四人、横浜を離れて、今度は千葉に引っ越した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4379s/>

---

時期はずれなバレンタインデーの話

2011年4月18日00時46分発行